

学校図書館を活用した調べ学習を支援するプログラムの開発と評価 Development and evaluation of a program to support "Investigative Learning" at primary school libraries

学籍番号：201821620

氏名：鈴木 花

Suzuki Hana

学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」の推進として、単元の全体的な知識である「概念的知識」の構造的な理解が各教科で重要とされている。「主体的・対話的で深い学び」の学習方法である調べ学習の従来のプロセスでは、調べる小テーマを複数の異なる内容から捉えられるような教示がなく、その結果、単元で学習した内容を偏った次元（「概念的知識」を構成する「具体的知識」の上位概念）でしか捉えることができず、「概念的知識」を部分的にしか理解できない。そこで本研究は、学校図書館を活用し、単元で学習した内容の多面的な理解と、学習課題を多面的に捉える方略の習得を目的とした調べ学習プログラムの開発とその評価、改善プログラムの提案を行うことを目的とした。

研究1では、予備調査1として実践で行う単元や使用する資料を検討するために、関東の公立小学校67校を対象に調べ学習の実施状況と学校図書館の学習環境に関する質問紙調査を行った。その結果、実施回数と次元数が多い単元を抽出し、設備の状況から多くの学校図書館が備えている百科事典や本を利用することとした。予備調査2では学習課題を多面的に捉える方略を習得させる指導法の収集のため、21件の文献に掲載された探求的な学習の指導法の収集と分析を行った。その結果、プログラムは「具体的知識」を児童がなじみやすい「調べるための柱」と呼ぶこととし、1.「調べるための柱」を立てる段階、2.情報探索の段階、3.まとめの段階を設けることとした。「調べるための柱」を立てる段階については、1回目は1つの次元から調べ、2回目はと複数の次元から調べることとし、段階的により高度な方略を使用することとした。さらに、調べたことのまとめを比較する体験を通して、学習した内容の多面的な理解と学習課題を多面的に捉える方略の習得を目的とした。

研究2では、開発した2回のプログラムの実践と、実践前後に1週間の間隔をあけて実践前・後課題として児童が持ち帰って取り組むワークを、小学4～5年生の6名を対象に行った。ワーク前・後の質問紙の評定（「調べるための柱」に対する有効性の認知・自己効力感など）と、進行の評価や学習した内容の多面的な理解度と学習課題を多面的に捉える方略の習得度からプログラムの学習効果を検討した。実践の結果、おおむね設定した時間で進行できた。理解度はまとめの段階で「学習課題」に沿った複数の次元から調べたことの記述があることを目標とし、目標を達成した・達成できなかったグループの中で実践前課題から評価点が伸びた・変化なしグループに分けた。その結果、実践後課題で目標を達成したのは6人中4人で、理解度が下がった児童はいなかった。理解度が伸びたグループは内容が異なる「調べるための柱」を意識的に用いるようになったことが感想や「調べるための柱」に関する質問紙の結果から示された。方略習得度は「調べるための柱」を立てる段階で「学習課題」に沿って異なる複数の次元についての記述があることを目標とした。その結果、理解度の目標を達成していた児童が方略習得度の評価で目標を達成していた。また、取り組む単元を履修済みと認識していることが、複数の次元の「調べるための柱」を立てられることに関連していた。このことから、未履修の児童・単元終了時の理解度が低い児童に対して次元を明示する改善プログラムを提案した。単元の知識が少ない単元導入時は次元の把握を目的とし、ワークシートに「調べるための柱」をあらかじめ記載することとした。理解度の確認が目的の単元最終時では実践同様に「調べるための柱」を学習者自身で立てるが、理解度の低い児童に対してヒントとして次元を明示することとした。

今後の課題として、改善プログラムをより多くの児童を対象としたクラス単位での実践の検討などがあげられる。

研究指導教員：鈴木 佳苗

副研究指導教員：吉田 右子